

砂遊びから見る乳幼児期の発達と保育の課題

講師

笠間 浩幸

同志社女子大学教授

1. はじめに

私の専門は幼児教育学、子ども学で、大学では小学校の生活科についても担当しています。特に砂場や砂遊びについて30余年研究を続けてきました。

きっかけは私の娘です。その日、朝から「お父さん、一緒にあそぼ!」とせがんでいた3歳になる娘をたまたま砂場に連れて行ったところ、ぱっとわたしから手を放して一人で遊び始めたのです。1時間以上も夢中で遊ぶ姿を見て「なぜこのようなものが3歳の子どもの気持ちをそこまで引き付けるのだろうか」と思ったことが始まりでした。

研究は「砂場の歴史」から「なぜ子どもが砂遊びに夢中になるのか」、更には「こんな砂場があったらいいのでは」「砂場にはこんな問題もあるのでは」と進めてきました。そして東日本大震災以降は、福島県における復興と新たな砂場環境創造の活動に力を注いできました。

(1) 福島の人々は、なぜ砂場を求めたのか

2011年、東日本大震災と原発事故が起きました。原発事故から約3年に渡り、福島では屋外での活動が制限されました。そうした中、外で遊べない子どもたちには精神的なストレスによる衝突や感情がコントロールできなくなるといったトラブルが起こるようになりました。「子どもたちの笑顔を取り戻したい」と願い、屋内に砂場を作る活動を始めました。当時福島県内には、私が関わったもの以外も含めて20カ所を超える大小様々な室内砂場が作られました。そこには子どもたちの歓声と笑顔が溢れました。

砂遊びは心からの喜びの活動であり、遊び心い

っぱいの気持ちを発散させることができます。それがどれほど子どもにとって大事だったかということに皆が気付くことになりました。外で自由に遊べない中、苦肉の策として始まった室内砂場が、本来砂場が持つ力を再発見する機会となりました。

保育の現場でも、昨日まで当たり前だった外に出て砂や石、木や水などの自然素材に触れて遊ぶような活動が一切できなくなりました。そのときの皆さんの苦しみと大変さはいかほどだったでしょう。

実は震災前から、汚れたり衛生面に不安があったりすることから砂場離れは、全国的な傾向としてありました。そのような中で原発事故が起こり、改めて子どもたちの育ちにとって必要なものとは何かが問い直され、砂場の大事さに気付くことになったのです。

なんとか砂場を取り戻したい。けれど、ただ単なる取り戻しであれば、また当たり前のものになり、汚れるからと埋没してしまう。ここで改めて砂場の持つ意味を問い直し、やはりこれは失ってはならないものだという思いを持ってこの遊び場を大事にしていこう。保育者や保護者の中でこのような機運が高まりました。

2014年、ようやく外遊びが解禁され始めた福島県で、郡山市私立幼稚園協会の「こどもがまんなかフェスティバル」の一環として、ゲートボール場2面を砂場にしたいイベントが開催されました。2日間の開催期間中に7千人を超える人が来場し、子どもはもちろんのこと保護者も思いっきり砂遊びを楽しめました。3年間、砂に一切触ることができなかった人にとっては、これほどの思いで触りたくなる素材なのだと改めて感じ

ました。

そして、地域に新たな砂場を作る取組を進めてきました。今の時代、地域に砂場を新設するということはあまりありません。けれども、あえて作りたいと思いました。私は、砂遊びは子どもを育て、人と人とをつなぎ、町や地域を創る力があると強く感じています。砂場を人々の交流のきっかけとして活かしたいと思いました。

（２）砂場は、近代以降の子ども観・遊び観を象徴する遊び場

私たちにとって砂場は身近な遊び場ですが、どのような歴史があるのでしょうか。

約２００年前のヨーロッパでは、子どもを「子ども」としてではなく、「小さな大人」「まだできあがっていない大人」と受け止められていました。早く大人にするために、鞭で打ったり訓練をしたりして育てることが一般的で、学校にも行けず大人に混ざって仕事をする子どももたくさんいました。そのような時代において、子どもの遊びは全く無意味で無駄なことと思われていました。

時代を経て、子どもは大人とは違う別の時間を生きている存在であり、その子どもの力を伸ばすのは遊びであるという捉え方も出てきました。子ども観や遊び観の大きな転換と共に、砂場という遊び場がヨーロッパのドイツで誕生し、やがてアメリカに渡りました。その当時、アメリカのボストンには貧困層が集まるスラム街があり、そこに砂場が作られました。そうすると、それまで皆さんだ行動をとらざるを得なかった子どもたちが、笑顔で生き生きとし始めたのです。これはすごいことだと、各地に砂場が作られるようになりました。その後ブランコやシーソーなどを加えた、いわゆる児童公園が広がっていきました。

当たり前の遊び場だと思われる砂場にも実はこのような歴史があります。そして時代と国は違えど、震災をきっかけとして今日に生きている人たちも、砂場がどれほど大事だったかを直感的に感じ取ることとなりました。

保育の現場では、時には保護者から「汚れるか

ら遊ばせないで欲しい」と言われたりすることで、心が揺れることもあるかと思います。けれど、砂場はこれほど人々が大事だと思い、歴史的にも裏打ちされた大事な素晴らしい遊び場であるのだと、この機会に改めて感じていただければと思います。

（３）チンパンジーと人間の子どもの砂遊び、その類似点と相違点

私は前任校で砂場の歴史を研究していました。２００４年に同志社女子大学が現代こども学科を立ち上げるのを機に異動することになりましたが、やはり大きな興味は「なぜ３歳の子どものそこまでして砂遊びに夢中になるのか」であり、それについてぜひ研究したいと思っていました。

異動したちょうどその時、京都大学の霊長類研究所のチンパンジーの親子がどのように砂に関わるかを観察する機会をいただきました。

人間でいうと５歳児くらいのチンパンジーのアユムくんは、砂の上で転がったり、砂を手で押し広げたりして全身で関わっていました。２０代後半の母親のアイちゃんは両手に道具を持って砂を移し替えるなど人間の３歳前後の子どもがするような動作をしていました。

人間の子どもの同じような動作が見られる一方、人間の世界にはあるのに、チンパンジーの世界には一切見ることができないものがありました。

まずは「声」です。歓声や呼びかけるような声が全くありません。それは「見る・見せるの関係性」がないことにも関連しています。だれかがやっていることをじっと見たり、見守ってあげたり、ずっと手をだしてあげたりするような場面がないのです。また、スコップで容器に砂を入れてもその上からトントンしたり型抜きをしたりする様子もありません。人間の子どもの当たり前に見られるものがないというのはどういうことなのでしょう。

このような疑問は、人間の子どもの砂遊びを見ていきたいと思っていた私に、良い研究の視点を

与えてくれました。

2. 保育課題としての砂遊びの捉え方

～大人の側からの考察～

2004年から2011年までの約7年間、2カ月に1度の頻度で、ある保育所に継続して出向き、子どもの砂遊びを見せていただきました。

最初に訪れたとき生まれてからまだ2回目の砂遊びだったという11カ月のAちゃんを保育所卒園時まで追って動画を撮り続けました。そしてAちゃんやその周りで遊ぶ子どもたちを、年齢を追って観察を続けると、子どもたちの成長発達と共に、砂遊びが変わっていく様子を見ることができました。それを映像教材「乳幼児期の砂遊び」（新宿スタジオ）としてまとめることができました。ここで得られた砂場の考察を、次に系統的な視点と構造的な視点でまとめてみます。

（1）砂遊びの系統的把握

今までは、砂場に子どもがいればそれをまとめて「砂遊び」と呼んでいたように思います。けれど、それぞれの年齢に応じて、あるいは子ども自身の生活体験や言葉の増加、人間関係ができあがっていく中では、遊び自体も大きく変化していき、様々なフェイズがあると考えています。系統的、長期的な視点で5つのフェイズとしてまとめてみましょう。

ア）フェイズ1：感覚的な出会いとしての砂遊び

子どもにとって砂場の魅力は、触り心地の良さと思われがちですが、乳児が初めて出会う際には少し刺激が強いようです。そのようなときには、保育者が手からサラサラとこぼしたり、型抜きを作ってあげたりすると、子どもは砂そのものに興味を持ち、見たり触れたりするなど「五感」を使って関わろうとします。

また、砂の上では座位を保ちやすくお座りし出した子どもでも長時間座っていることができます。そして、はいはいをしたり立ち上がったたりするようになると、自分の背丈ほどの砂山に登った

ります。これは「深部感覚」といった筋肉や関節、バランスを総動員した動きです。

この時期は、体全体で外の世界との関係性を持っています。

イ）フェイズ2：砂で遊ばない砂遊び

砂場でのお座りが安定し、両手が自由になると、子どもは身近にある「もの」に大きな興味を示します。つかんだり離したり、振り回したり「もの」同士を打ち合わせてみたり、砂そのものよりも「もの」への関心をどんどん高めます。1歳児期のこのような遊びを「砂で遊ばない砂遊び」と名付けました。1歳代の子どものほとんどは手が直接砂に触れるよりも、手に「もの」を持ち、その「もの」を操作するために砂と関わるといった姿が特徴的だからです。

それを確かめるために、ある実験を行いました。砂遊びが大好きな1歳5カ月から1歳7カ月の幼児5名に「もの」を出さない砂場で遊んでもらいました。先生の働きかけに少しは反応を見せますが、今一つ遊びには乗り切れないようです。実験開始10分後、いつものおもちゃが登場するとさっそくお気に入りのおもちゃを選び黙々と遊び始め、その後も30分以上砂遊びは続けました。

このような遊びの中で、手指の巧緻性、ものを道具として使い込むこと、目と手の協応などを獲得していきます。

ウ）フェイズ3：砂で遊ぶ砂遊び

2歳以降の子どもたちは次第に「もの」を手放し、体全体の感覚や手や指のしなやかな動きを伴いながら砂の性質や状態に関わる遊びを展開するようになります。体と砂との直接的に触れ合いが多くなるこのような遊びはまさに「砂で遊ぶ砂遊び」と言ってよいでしょう。砂と水が混ざり合ったとき、子どもたちはいろいろな砂の変化に出会います。感触の違いや粘り気が増して固まることなど、子どもたちは体を通して実感します。

例えば、泥だんご作りは砂と水の配分を考えながら、砂が固まるという性質を最大限に引き出す

遊びです。そして、ある程度力を入れないと固まりませんし、入れすぎると壊れるなど、手や指先の微妙な力の調整も必要とします。砂山のトンネル作りなども、どう高く積むか、どの角度でどれくらいの大きさの穴を掘ればいいのかなど、砂の物理的な状態を確かめながら、砂と対話して遊んでいると言えるでしょう。

エ) フェイズ4：イメージと言葉が広がる砂遊び

2歳後半以降、徐々に言葉が出てきます。「イメージと言葉が広がる砂遊び」と題していますが、逆に「イメージと言葉が広げる砂遊び」とも言えるでしょう。

砂はごっこ遊びの素材になります。カップに砂を入れてケーキに見立て「はい、どうぞ」と先生や友達と言葉のやりとりを楽しんだり、「もぐもぐおいしいね」と言葉を交わしてイメージを広げたり、大きな砂山をかき氷の山に見立て、何味のシロップをかけるか先生や友達と言葉を交わすのを楽しんだり、水をためたダムから一気に流し、その様子に歓声をあげたり、スコップを杵に見立て「ぺったん、ぺったん」と友達と声も心も合せてもちつきを楽しんだり、テーブルにいっぱいごちそうを並べ、まるでパーティーのように会話ややりとりを楽しんだり・・・

生活の広がりと言葉の獲得と共に、子どもたちはいろいろなイメージを膨らませ、砂を使って自分の思いを形に表します。また、その思いは言葉によって他の子どもたちにも伝わります。砂を介したイメージの共有と言葉の広がりや友達の関わりを楽しむことにつながります。

オ) 多様な素材が広げる砂遊び

少し子どもの発達の姿から、物理空間的環境の方にも目を向けてみましょう。

子どもたちのイメージの広がりと共に、これまでは砂場であまり用いられることのなかった「もの」が遊びを豊かにします。

例えば、段ボールです。これは砂場での家作りには最適な素材です。どうすれば屋根が作れるか、

しっかりとつなぎ合わせることができるか、いろいろと考えながら力を合わせて作業を進めて遊べます。他にも塩ビ管や雨どい、ホース、ボウル、丸太、板切れ、フープなど砂遊びとは縁遠いものも遊びに取り入れることで、子どもたちの発想は広がります。

一般に4、5歳時期の子どもたちは、砂遊びの広がりがあまり見られず、5歳児には物足りない遊びと思われることもあるようです。でも本当にそうでしょうか。そこにより多様な素材や道具をプラスすることで砂遊びは違った展開を見せます。例えば、左官職人が使う木ゴテは砂を掘ったり押し固めたりなでつけたりでき、金ゴテは砂をきれいに切ることができ、底をくり抜いたバケツは大きな固い砂型を作ることができます。友達と力や心を合わせて大きな作品を作るなど、更なる広がりを見ることができるようでしょう。

カ) 遊び空間としての砂場

砂場は園庭にあるごく普通の遊び場です。

砂場は一人でも少人数でも大勢でもそれぞれが自由に遊んだり関わり合ったりしながら遊ぶことができる空間です。

砂場は遊ぶ子どもの年齢を問いません。乳児から年少、年中、年長児までそれぞれの発達段階に応じた遊びが広がります。またそこでは年上の子どもたちが年下の子どもの面倒をみるという縦の人間関係もごく普通に見ることができます。

砂場は子どもの体も心もそのまま受け止めます。ちょっと遊びに疲れたとき、友達との関係がうまくいかなかったとき、理由もなく少しぼーっとしていたいとき、寝転びたいとき、どんなときでも砂場は子どもたちの安心できる居場所です。

砂場は子どもたちの挑戦する意欲を支え、積極的な活動を生み出す場にもなります。まだよちよち歩きの子どもの新しいものとの出会いを求め、自分の世界をどんどんと広げていきます。

砂遊びは砂場だけにとどまりません。砂場と周辺環境が一体となって遊びが広がります。砂は移動可能な素材です。境界があるようでない、ない

ようであるのが砂場の特徴です。椅子やテーブルを置くなど、砂場を含めた周辺環境をどのように整えていくかは保育の大切な課題です。

砂場の環境整備のポイントとして、3つあげておきましょう。1つ目は砂場をふかふかの砂で満たす。2つ目は多様な「もの」を豊富に準備する。3つ目は砂遊びへのアクセスがしやすい周辺環境を整える。もちろん衛生の維持や日よけの設置、水道、そして理解ある支援者としての保育者の存在は言うまでもありません。

キ) フェイズ5：アートとしての砂遊び

発達のフェイズの話に戻しましょう。一般的にはフェイズ4の「イメージと言葉が広がる砂遊び」で終わりだと思われがちですが、私は「アートとしての砂遊び」を提案しています。

「お城を作りたい」「友達と一緒にお話の世界を作りたい」など、イメージを形にしたいという目的性を持ち、自分が持っている技術を最大限に活かして作りあげていく遊びです。立派なものができたかどうかではなく、自分自身の思いを表現できたこととしてアートと呼びたいと思います。

このアートは5、6歳になって突然出てくるものではなく、型抜きができるようになる2歳頃から芽生えていると考えています。この頃の子どもでも、自分の作った型が嫌だなと思うと壊したり、いいなと思えるともう1個作ったりする姿が見られます。それは自分自身の中で評価基準がはっきりしているからです。私はこれを子どもながらのアートの出発点だと思っています。

（2）砂遊びの構造的把握

砂遊びの系統的把握として、長期的な視点で見てきましたが、一方、その一瞬、一瞬の行動的な場面をどう捉えるかの視点も重要です。私は構造的な視点として「感覚」「情緒」「身体運動」「物の操作」「ことば」「社会性」「想像と創造」「認知」「科学的態度」「自己」の10の発達の要素でまとめてみました。これをもって子どもの行動や遊びの場面、場面をどう捉え、それをどのように伝

えるかはとても重要だと思うのです。

室内砂場で遊ぶイベントを行ったときのことで。子どもが砂場で遊び始めるとほとんどの保護者が携帯電話を触り始めました。子どもがおもしろいことをしていても気付きません。そこで私は子どもの動作やその大切さを発達に照らして解説し始めると、携帯電話を片付けて子どもの様子を見てくださるようになりました。

先生方はその道のプロです。長期的な視野と今をどう捉えるかをぜひ伝えてください。それは大人の勝手な解釈であり仮説かもしれません。けれど、その仮説を何度も積み重ねることで「もしかしたらこうなのかな」と思われることがきっとあると思います。私は子どもたちから道具を取り上げて実験することによって「砂で遊ばない砂遊び」の考えに至りました。まさに先生方は仮説と実験を繰り返しておられます。それが保育の現場なのだと思います。

このようなことは全ての活動、遊びに言えることです。砂場での学びをいろいろな保育の活動の場面に広げていって欲しいと思っています。

平成30年の要領・指針の改訂で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が出されました。その10項目と私が発達の要素として出した10項目とはほぼ重なります。大切なことはこれまで確認してきたようにどういう視点で子どもや遊びを見るかです。要領・指針で10の姿が出されたからといって、無理矢理に教え込まなければならないものではありません。10の内容は、むしろ園ではこれまで当たり前にやってきたことです。ですから今回の改定の意味は、小学校以降の方たちも、幼児教育というものを理解し、関係性を作っていくうえでの共通言語を持ったということではないかと思っています。

育みたい資質・能力についても、高等学校まで貫かれました。要は、子どもの育ちは乳幼児期から発展的につながっており、乳幼児期の感覚的な思いを土台とした学びが小学校以降の抽象的な学びの土台になるのだということ、そして改めて私たちがやってきた仕事こそが、その土台づくり

だったのだということを示してくれたものと受け止めたいと思います。小学校以降の先生方とお話するときはぜひ園の先生方の方からお伝えしていただきたいと思っています。

近年アクティブラーニングという言葉をよく耳にするようになりましたが、私たちは昔からやっています。乳幼児期にアクティブがないラーニングはあり得ません。文部科学省が「遊びのプロセス例」として提示している「遊びの創出」「遊びへの没頭」「遊びの振り返り」についても、これまで紹介した砂場の遊びの中に全て見ることができます。遊びのプロセス例に沿って何かをしなければならぬのではなく、これまで取り組んできた保育活動の実践を、より自覚的に観ることが大事ではないかと思っています。

3. 子どもはなぜ砂遊びが好きなのか

～子どもの側からの考察～

私の研究の基盤となっている「子どもはなぜ砂遊びが好きなのか」について、現段階での考えを3つにまとめてみました。

1つ目は、感覚的な心地よさと面白さです。これまで述べてきたように、五感と深部感覚をしつかりと使い込んでいくことの楽しさです。

2つ目は、自分自身の身体と外部世界との関係性がどんどん広がっていくことです。砂そのものの、そこでの自分自身の身体の動き、そしてものとの関係性を通して、自分自身を見直すことができるためです。

3つ目はこういった活動が自分のペースでできるということです。ゆったりとやれる、あるいは次から次へと挑戦する、また時にやりたくなければやらなくてもいい。泥団子を作ってもいいし、たこ焼きを作ってもいい。一人で遊んでもいいし、友達との関係性で展開していてもいい。もの、人との関係性を自分のペースでできる場です。

このように砂場では、自分自身が外の世界とつながり、自分自身のペースで物事を進め、自分自身のやりたい思いでやってみて失敗を繰り返し、試行錯誤してまたやってみることができます。こ

のことが子どもにとってのアクティブラーニングであり、自分自身を知っていく上で非常に重要です。「自分を振り返る自分」のことをメタ認知と呼んでいますが、これが徐々にできていきます。だからこそ遊びを通して成長し、伸びていく自分自身の変化を、言葉にはできなくても、嬉しいのです。できるようになったときの嬉しさ、喜び、そういったものを、砂場では多様で多面的な形で実現することができます。

もちろんこれは砂場だけではありません。いろいろな場面で展開されるはずです。何度も言いますが、砂場の場面を他の遊びや場面に応用、転用しながら考えていくと、今までの保育の見方や子どもの活動の捉え方の視点が少し変わってくるのではないかなと思います。

4. おわりに

(1) 砂遊びに関する歴史的な言葉

ドイツの諺に「砂は最良のエducator」というものがあります。エducatorとは教育者のことです。ドイツで始まった砂場ですが、砂は子どもを生き生きとさせると昔から捉えられてきたようです。

「砂まみれ、泥だらけで遊ぶのは、子ども時代の特権である」これは、ボストンで砂場を作ったときに活躍したケイト・ガネット・ウェルズという女性の言葉です。

「砂遊びには、勤勉な努力、見通しを持った運営、道徳、地理、数学等あらゆる教育の要素が含まれている。多様な興味と活動を統合させる砂遊びは、理想的である。教育においては、理想的なものほど实际的であり、实际的なものは理想的なものである」これはアメリカの心理学の大家であるスタンレー・ホールが、自分の子どものために砂場を作り、そこで5年間子どもの砂遊びがどう変わったかを見続けて言った言葉です。

「人生に必要な智慧は、すべて幼稚園の砂場で学んだ」哲学者のロバート・フルガムが書いた本のタイトルです。実はこの本には砂場のことは2ページほどしか載っていません。それでも、砂場

を小さいときの遊びの象徴として使い、その時期の大事さを表した言葉がこれだったのです。まさに人生の土台を乳幼児期の子どもたちが過ごしていると言っています。

（２）いろいろな砂場とその活用

日本の砂場はほとんどどこも同じような仕様です。以前訪れたニュージーランドでは、どこに行っても違う砂場に出会いました。ある幼稚園の砂場では、薬品や火まで使って火山をイメージして先生と子どもたちが遊んでいました。ある砂場では、砂場の中にテーブルや棚が設置されており一つの面白い遊び空間となっていました。またあるところでは、テラスの屋根の下が砂場になっており、張り出した屋根からはビニールシートが出せるようになっているので雨が降っても遊べるようになっていました。

北海道では砂場で遊べる季節が限られています。そこで釧路市のこどもの遊びと学びを融合した施設「こども遊学館」では、新設する際に天候に左右されない137㎡もの広さを持つ室内砂場を作りました。そこには車椅子の子どもが遊べるテーブル状の小さな砂場も設けています。訪問していたときにちょうど車椅子に乗った子どもが来ていました。ところが、その子は、砂のテーブルで、手だけで遊ぶのではなく、自分から望んで体ごと砂場に入れてもらって遊び始めたのです。これは私にとって嬉しい誤算でした。子どもたちは、安心して全身で砂との関わることを求めているのです。また、その施設では90名の保育者を対象として、砂で遊ぶ研修会もしました。先生方は保育や子どものことを語り合いながらとても楽しんで砂遊びをされていました。これがその後大人も子どもと一緒にやる砂場ワークショップをするきっかけになりました。そして全国各地において様々な親子砂遊びやサンドアートを展開しています。

（３）砂場には「適切な砂」を

砂場には是非良い砂を入れてください。良い砂

が入っていないとコチコチに固まってしまい毎日掘り起こしをしなければなりません。私の大学にも砂場を作っていますが、一切掘り起こしはいりません。カバーをとった瞬間いつもふかふかです。固まってしまうのは土が入っているからです。

砂とは粒の大きさが0.075mmから2mmまでのものを言います。これよりも小さい粒や大きい粒と一緒に入っていると粒の間に粒が入ってしまい固まってしまいます。同じ大きさの粒ばかりであれば固まりません。良い砂場には良い砂が入っています。

（４）そして砂場から

砂は子どもを育て、人と人をつなぎ、町や地域を創る力がある、これは決して大げさなことではありません。

フランスでは、裕福な人たちは夏のバカンスに地中海へ出かけます。それが無理な方のためにと、パリ市庁舎前に砂場を作ったところ大人気を博しました。その後この取組はセーヌ川沿いにどんどんと広がっています。砂が入るだけで人々が集まり楽しめるのです。

先生方のところは身近なところに砂場があります。砂場の大事さと可能性を保育に活かし、子どもや保護者、先生方とがつながり、地域の子育て支援のセンターとして、かけがえのない子どもの時間と育ちを受け渡していただきたいと願っています。

令和2年度第7回共同機構研修会

令和2年9月4日

於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館